

# 「山折哲雄氏論文」にモノ申す

山折氏は、自分の言葉で語れ、と言う。だが、歴史は「史料をして語らしめる」ものではないか

新田均

皇學館大学文学部助教授



「あゝやっぱり、先生があの論文で書き  
になりたかったのは学問的成果ではなく、  
「自分のイデオロギーや怨念だったんです  
ね」。これが拙論(本誌九月号「山折哲雄氏  
に異議あり」先生不勉強ですゾ)に対  
する山折氏の反批判(「それでも『鎮守の  
森』は泣いている」『中央公論』十月号—  
以下「それでも泣いている」)を読みおえて  
の率直な感慨だった。この感慨の根拠をこ  
れから私は述べていこうとしているわけだ  
が、その前に、「山折氏はこの分野におけ  
る最近の研究に目を通していない」という  
私の指摘を認められて、拙著や阪本是丸  
氏、山口輝臣氏の著書に「あらためて」

(?)目を通されたという。その素直さと、  
私が一冊通読するのに二カ月近くを要した  
お二人の研究者の著書を、拙著も含めて一  
カ月弱で読破された学力に、まずは敬意を  
表したい。

しかし、敬意は表するものの、それだけ  
で拙論を批判する前提が整うわけではな  
い。山折氏に「硬直した徹視的思考」(要  
するに「視野が狭い」と言うことかな?)と  
批判されてしまう非才をも顧みず、明治維  
新から敗戦までの政教関係について、「国  
家神道」論に代わる新たな枠組みを提示し  
た拙論「近代政教関係研究についての一試  
論——『国家神道』論を超えて——」(『皇

學館大學論叢』三一巻一号、平成十年二月)  
や「近代日本政教関係の時代区分につい  
て」(憲法政治学会編『近代憲法への問いか  
け——憲法学の周縁世界』成蹊堂、平成十一  
年七月)、自らの仮説の基礎を整えるため  
に、従来の主要な「国家神道」論を体系的  
に整理し、批判した拙論「『国家神道』論  
の系譜(上)(下)」(『皇學館大學論叢』三  
二巻一号と二号、平成十一年二月と四月)、  
山折氏が読んだと言う山口輝臣氏の「明治  
国家と宗教」(東京大学出版会、平成十一  
年)における先行学説の整理の仕方を批判  
した拙論「山口輝臣著『明治国家と宗教』  
を批判する——特に学説の整理と問題設定

における学問的倫理性について——」(『皇  
學館大學論叢』三二巻三号、平成十一年六  
月)などには、少なくともお目通しいた  
きたかった。

山折氏は、阪本氏らの論文を読みすすめ  
ていくうちに、「国家神道」に関する議論  
がじつに錯綜した課題を抱え、なかなか明  
確な像を結ぶにいたっていないことに「氣  
づかせられた」と述べている。「氣づかせ  
られた」というのは、実はこれらの論文を  
「はじめて読んだ」ということを思わず暴  
露してしまったと解釈すべきか、それとも  
「国家神道」についての「錯綜した課題」  
も知らずに、これまで論文を書いてきたと  
いう意味なのか、判断に苦しむが、いずれ  
にしても、今まで詳しいことは知らなかつ  
た、ことだけは確からしい。

この素直な告白にも敬意を表したいが、



新田均

一九五八年長野県生まれ。  
早稲田大学政治経済学部  
卒。同大学大学院政治学  
研究科博士後期課程修了。  
博士(神道学)。著書に『近  
代政教関係の基礎的研究  
(大明堂)がある。

次の論理の飛躍には驚かされた。「要する  
に論争点が未解決のままのこざれていると  
いうことであるが、そういうこともあって  
私がさきの論文で提出した仮説が氏の批判  
によって覆されたとはどうい思えないの  
である」。ある研究分野に未解決の争点が  
残されているということ、山折説の有効  
性に、何の関係があるのだろうか。まさ  
か、議論が錯綜しているから、いい加減  
なことを言っても通用する、と言うわけ  
もあるまい。

これには参った!

それにも増して驚かされたのは、私の批  
判に対する具体的な批判を行う「前に」、  
私の議論の「前提になっている思想」なる  
ものについて述べはじめ、それは私にとつ  
て「学問上の師にあたるらしい葦津彦彦氏  
の思想」といつてもいいと断定し、「その  
思想は、私の拠って立つ考え方とは根本的  
に相容れないものだ」とレットルを貼られ  
てしまったことだ。

これには参った! 本当に驚いた! 学  
問的な議論にこのような角度から入るの

は、邪道である。最初から「問答無用」と  
言っているようなものだ。山折氏にとって  
は自分の気持ちをも正直に吐露しただけなの  
かもしれないが、研究者の批判というもの  
は、相手の論理や論拠を丹念に追い、読者  
に説明し、それを丁寧に批判し、覆すこと  
によって、最終的に、それらに依拠する  
「思想なるもの」を崩すというのが筋では  
ないか。そうした手続きを経る前に、いき  
なり「俺とお前は思想が違う」などという  
のは学者の言うセリフではない。そんなこ  
とを言えば、「あゝ貴方にとって大切な  
は証拠や論理ではなく、結論(イデオロギ  
ー)なんですわ」と見透かされるのが落ち  
だ。

私はこの分野で何人かの専門家と議論を  
交えてきたが、「前提となる思想が相容れ  
ない」などという観点から私を批判した人  
物は一人もいなかった。当たり前だ! 研  
究者一人一人の思想が違うのは自明で、そ  
れを前提として、誰もが納得せざるを得な  
い事実や解釈を探索するのが「学問的な営  
み」なのだ。

それにしても、私の議論の「前提になっ  
ている思想」なるものを語ろうとするにあ

たつて、学問上の師にあたる「らしい」華津彦氏などという曖昧な表現を用いているのは、どうしたことか？ ちゃんと調べなさい。「先生、基礎の確かな議論をするためには、粒々辛苦、資料や情報を集め、読みこなさなければいけませんよ。手を抜いてはいけません」。この言葉を、これから私は何回も繰り返さなければならぬだろう。

それにしても、学問上の師にあたる「らしい」とする根拠が、引用の長さ、文章全体の流れ、方法上の視点というには思わす突ってしまった。おそらく時間の制約上拙論だけを根拠にして論じなければならなかったために、くるしまぎれにこんな根拠を列挙されたのであろうが、そんなことを根拠にすれば、私の議論の前提となっている「思想」は、無数にある。島地黙雷、穂積八束、上杉慎吉、加藤玄智、W・P・ウッダード、織田万平等。その中には、互いに思想的に相容れない人物たちもいて、山折氏の言う通りならば、私は思想的に分裂した人間ということになってしまふ。

ところで私は、山折氏のように他人の「思想」を端的に把握するとか、森の泣き

声や先祖の嘆きが聞こえるとかいった「超能力」(?)を持ち合わせていない。そこで、以下の議論においても、山折氏の「論拠と論理」を逐一吟味するという、愚直な方法をとらざるをえないことをあらかじめお断りしておく。

### 「思想の相違」よりモラルが問題だ

山折氏は私が引用している華津彦氏の文章の中に、柳田国男や折口信夫に対する尋常ならざる「敵意」「反感」「怨念の雄叫び」を感じるという。感覚の違いといってしまうと、それまでだが、私にはそのようなものは感じられない。厳しい批判の裏に強烈な使命感を感じはする。厳しく批判しているのは「怨念」を抱いている証拠だ、との反論もあり得るが、それはあまりにも幼稚な発想だ。恨んでいなくても、いや、愛していても、厳しく批判し、対峙することがあり得るのは世の常の姿ではないか。また、「学問的対決」はいいが、「思想的政治的対決」には「反感」や「怨念」が伴うなどというのも、同様に根拠がない。華津氏の思想について論じながら、どう

も山折氏は、華津氏の書いたものを私の引用部分しか読んでいないようだ。せめて、『神國の民の心』(鳥津書房)くらいは手に入れて通読するくらいの誠実さがあった方がいいのではないか。そうすれば、華津氏が民俗学を評価している部分や、逆に学問的に批判している部分も視野に入れることができたはずだ。

お断りしておくが、私はここで最低限のことを要求しているにすぎない。本来であれば、華津氏の思想を論じ、「国家神道」を論じるならば、華津氏の『国家神道とは何だったのか』(神社新報社、昭和六十二年)くらいは読んで、言及すべきであったろう。いやいや、やはり「思想」などという人格全体にかかわるものを論じ、「怨念」などという決して本人にとって名譽でない感情を見出そうとするならば、『華津彦選集』全三巻(神社新報社、平成八年)くらいは、いくら一冊千頁前後の大冊とは言え、やはり目を通しておくのが礼儀だろう。

「ちゃんと史料を調べずに想像だけで物語を組み立てると、とんでもない間違いを犯すよ」と、卒論指導で学生に言っている大

学の教員は多いだろう。けれども、自分自身が歴史の証言者となってそのことの重要性を具体的に説明することが出来る機会に恵まれるというのは、めったにあることではない。「私への批判者、新田均氏もまたその反感と怨念を華津氏と共有し、その思想的政治的対決を選びとっているのである」との一文は、私にその希有な機会を与えてくれた。

私は山折氏に「怨念」などは抱いていない。けれども、山折氏が私の論文の中に「反感」を感じとったのは、ある意味で正しい。だが、それは柳田・折口に対する華津氏の「反感」を継承しているからではない。仮に継承しているとすれば、八つ当たりの山折氏を批判するのではなく、私は彼ら自身を、それこそ自らの言葉で批判す

る。

私が山折論文を批判した経緯はこうである。ある日、大学の廊下を歩いていたら、ある教授とすれ違い、その教授が「山折氏が『中央公論』に書いている論文、読んだ？ 神道をやっている人はあれについてきちっとした見解を示さないとイケないんじゃないか」と言われた。その時、迂闊にも私は山折論文のことを知らなかった。そこで早速買い求めて読んでみると、確かに問題が多く、きちっと反論しなければいけない、と感じた。しかし、その時は「反感」までは感じなかった。「反感」を感じるようになったのは、反論のために、じっくりと読みはじめた。「あれ、この文章どこかで読んだぞ」と気づいてからだ。調べてみると、近代神道に対する解説部分が、

五年前の『諸君！』に掲載された文章そのままの「切り張り」であることが判明した。

山折氏は「論旨が五年前に発表した拙文と同じであった」と書いているが、ごまかしてもらっては困る。「論旨」が同じなのではない。「全くの切り張り」なのだ。森発言に対してあんなに大げさに嘆いてみせながら、このいい加減さはなんだ。様々な人々が苦勞を重ねてきた神道の歴史、これからの日本を左右しかねない国家の精神的基礎に関する問題を論じながら、あまりに安易でお手軽な姿勢、それを棚あげにした怒りのポーズ。粒々辛苦、膨大な量の史料に四苦八苦しなから真理を探究している「プロたち」がいることを知ってか知らずか、基礎的な事実も押さえていないのに、

さも大局からものを見ているような語り口。私が怒っているのは、「思想の相違」などといった高級なものに対してではない。単に学者としての基本姿勢という極々初歩的なもの、あえて言えば、学問人としての「モラル」に対してなのだ。

葦津は柳田・折口に思想的政治的に対決している、だから、葦津を引用して私を批判している新田も私に思想的政治的対決を挑んでいる、と山折氏は言う。

「そんなわけ無いよね月」（宇多田ヒカル「Wait & See——リスク——」より）。

山折氏には時代状況の相違がもつ意味が分かっている。占領下でも無いのに、何で私が山折氏相手に思想的政治的対決を選ばねばならないのか。時代錯誤もはなはだしい。言わせてもらおう。

「先生がご自分を柳田・折口両先生になぞらえたいお気持ちは分らないではないですが、私は葦津先生のような豪傑ではありませんので、先生と思想的政治的に対決するなどという恐ろしいことはご遠慮申し上げます。ただ、『俺の分野でなめたまねはさせねえ』というのが、私の学問上の師である阪本丸先生の教えでした。そんなわ

判断は読者にまかせるとは、卑怯な態度というほかないだろう」と批判している。

私の引用が長すぎたために、どうも山折氏は基本的な文脈を見失ってしまったらしい。私がここで直接の批判の対象にしているのは、柳田・折口ではなくて、山折氏である。山折氏が超歴史的観点から神道史を全否定しているのに対して、皇室による日本統合の意味を無視してよいのか？ 歴史の変遷、継続、発展の意味を無視してよいのか？ 現代の社会条件の何たるかを明らかにする見識なき、ただの古代賛美は国を亡ぼすのではないか？ という問いを葦津氏の文章を引用する形で、私は投げかけたのである。

山折氏は、何故、新田は自分の言葉で語らないのかと問い、「卑怯」とまで言い放っている。しかし、歴史学の分野において「史料をして語らせる」という手法は、オーストリアの方法であって、それに対して「卑怯な態度」などと言われる筋合いはない。問題になるとすれば、史料を駆使して自分の言わんとしているところを十分に表現し得ているのかどうか、ということであろう。あるいは、読み手の読解力の問題

けで、臆病な私も『学問的な対決』ならできらうと思ひ、ノミの心臓をどきどきさせながら拙稿を執筆してしまったのである」

山折氏は葦津氏の議論に「怨念」を見る理由を、戦後において柳田民俗学が繁栄・隆盛をきわめたのに対して、「葦津氏らの主張はほとんど顧みられることなく、世論のはるかかなたに押しやられてしまったからである」と説明している。そして、

「そ断定できる史料は提示していない。誰かが有名になった、誰かの学説がときめいている、そのことだけで十分に「怨念」の原因になる。それは、山折氏にとっては個人的に納得できる真理なのかもしれないが、世間には世論や学界の毀誉褒貶など何とも思わない人々もいる。しかも、葦津氏は学者ではない。神社神道界に身を置いていた葦津氏が、世間一般における学説の動向に対して、どうして「怨念」にまで結晶する嫉妬を抱かなければならなかったのだろう。断定には「証拠」が必要だ。

ただ、ここで山折氏が指摘している「天皇信仰を中軸とする皇室神道として日本神道をとらえるか、（中略）地方分散的な神

がある場合もあるだろう。さて、この場合、私の文章力、引用の仕方の問題があるのか、それとも山折氏の読解力の問題があるのかは、やはり、「読者の判断にお任せする」以外にない。

また、私が葦津氏の文章を引用したのは、単なる論理的な反論を葦津氏に肩代わりしてもらったためではない。山折氏は「神道は宗教宣言をすべきであった」などとノンキなことを言っているが、その苦難の時代に生きた神社神道人が、どのような考えをもっていたのか、それを明らかにしておく必要があると考えたからである。つまり、論理的な反論と史料提示との一石二鳥を、葦津氏を引用することで試みたわけである。枚数に制限がある雑誌論文においては、この程度のテクニクを駆使することは当然に許されるべきことだと思う。

そして、残念ながら、私には、山折氏のように見たこともない過去の姿をありありと自分の言葉で語る能力がそなわっていない。山折氏には一万年前の昔をリアルに語る能力があるのに、私には、五十年前のことさえ見えない。そのような無能力を自覚しているが故に、私には、その時その場に

道を重視していくのが、という論争点」は、指摘そのものは決して目新しいものではないが、やはり重要である。そして、重要、いや神道にとって最重要の課題だけに、事実を厳格に探求し、論理を精査し、そのために必要な地道な努力の積み重ねを厭わぬ覚悟を持ち、自らがなそうとしていく議論の祖先と子孫に対する責任を畏れる。そのような「モラル」を欠いて安易に語れることではない。そのことをこの際はずきりと確認しておきたい。要するに、「うけをねらった思いつきなどによりかかって語れる問題では決してない」ということだ。

「史料をして語らせる」は基本だ

さて、私が葦津氏の文を長々と引用したことについて、山折氏は「新田氏はここで、なぜ自分の言葉で語らなかつたのだろう。柳田・折口学説にたいする批判を、なぜ葦津氏の主張に全面的におんぶする形でやろうとしたのか。それでは新田氏の学問的立場が、葦津学説のたんなるコピーになつてしまつてはいないか。その上であとの

いた人物の語るところに謙虚に耳を傾ける以外に道はないのである。山折氏も葦津氏の文章を読んで、戦争直後の思想状況を「思いおこした」と言われているのだから、私の意図は成功したのだろうか。

山折先生は、葦津を引用するだけでは新田は葦津説の「たんなるコピー」になつてしまつてはいないか、と私の「学問的立場」まで心配してくださっている。有り難い。しかし、残念ながら、私の立場は、先生が予想しておられるような深遠なものではなく、ただただ「手を抜くな、ごまかさな」というだけにすぎない。

さて、山折氏は拙論批判に先だつて、近年の業績に目を通されたという。しかし、それにも拘わらず、「なぜさきの私の仮説が誤っているのがみえてはこなかった」らしい。そして、「新田氏のいう実証研究なるものがあまりにも狭い文献主義にとらわれ、歴史の流れを大局的に観察しようとはしない点が目立つ」と主張する。また、私の考えは「文書的証拠がなければすべては存在しなかつたとする硬直した徹視的思考」というほかはないのだそうだ。「文書的証拠がなければすべては存在しな

かった」などと主張する者がいたとしたら、とんでもないことだ。私の学問上の師で「あるらしい」葦津彦彦氏も、しばしばそのことを戒めておられたようだ。それにもかかわらず、この思考は学問領域ではその「厳密性」のゆえに一定程度の正当性を主張しうる。ところが、証拠も示さずにある事実が存在したなどと主張することは、到底、許されるものではない。しかも、反証の論拠が提示されている場合にはなおさらである。

一、二の史料と教科書的な知識から、気のきいた仮説らしきものを思いつくことは容易である。しかし、その一、二の史料が決定的なものである場合を除いて、そこにどとどまってもらっては困る。まして「断定する」などもってのほかだ。そんなものを「大局的な観察」とは呼ばない。プロは自らの仮説を組み立てるために、また、それを出来るだけ厳密に立証するために、多くの史料に当たり、その史料の語るところにしたがって全体的な枠組みを再検討するという地道な作業に日々勤しんでいる。曖昧な思いつきを述べておいて、否定する史料が無かったから（見つけられなかったか

知識さえあれば、日本の天皇がすなわちキリスト教でいう絶対神と同一であるなど口走る人間がいったどこにしよう」という言葉を思い出していただきたい。「先生、本当に私の本、読んだんですか？ いまですよ、います。わずかな知識どころか膨大な宗教学の知識をもつて、それを主張した人物が。加藤玄智ですよ。拙著の後ろの方だったので、お読みになる時間がなかったかもしれない。こういう有力な宗教学者がいたにもかかわらず、『国体の本義』は『現人神と申し奉るの』、所謂絶対神とか、全知全能の神とかいふが如き意味の神とは異なり」と書いてあるんです。だから私は『わざわざ断っている』と書いたんです。

### 山折氏に「二回答いただきたいこと」

ここで、私が次回の山折氏の再反論においてお答えいただきたいと考えていることを列記しておこう。

一、私はヨーロッパにおける伊藤博文の経験と判断、キリスト教に対する「対抗」意識が、帝国憲法の第一条（万世一系の規定）となって「実った」とする、山折氏の

ら？ そこまで詳しく調べなかったから？ 調べたくなかったから？、自らの説に問題はないなどというのは「プロ」の言葉ではない。この分野のプロではない山折氏に「原史料」まで当たれとは言わないが、せめて先行研究の中から、自らの説を立証するようなものを探し出して、私に反論してほしいかった。

私が「曖昧な思いつき」というのは、山折氏の言う「伝統神道（または神社神道）の一神教化あるいはキリスト教化」という「仮説」(?)のことである。一神教化、キリスト教化とは「天照大神を絶対神と見なし、それと一体であるときれた天皇をも絶対神と見なすようになった、あるいはそのような方向を目指した」という意味だろうと私は解釈したのだが、それは大間違いだ。そうで、山折氏は「わずかな宗教学的知識さえあれば、日本の天皇がすなわちキリスト教でいう絶対神と同一である」と口走る人間がいったどこにしよう。私がいつているのは、(中略)万世一系の天皇を「一神教化しようとした」ということである(「傍点引用者」と反論(?)している。わけが分かりません。

主張に対して、そんな「底の浅いものではない」と批判した。それは、伊藤の個人的なりダーシップやキリスト教に対する対抗意識を中核として「万世一系の規定」が成立したわけではないという意味だった。これに対して、山折氏は「それはそうだろう」と書いている。ならば、この点については、私の反論をお認めいただいたと解釈してよろしいか。

二、山折氏は「日本においては仏教も神道も宗教として人心を帰向せしめるに乏しい。されば、ひとり皇室をもって基軸とするほかにないではないか」という趣旨の伊藤の発言を、「日本國家の基軸として皇室、すなわち天皇および皇室を中心とする神道祭祀をもちだし」たものと解釈している。「神道」は人心を帰向せしめる力に乏しいと言ふ伊藤が、どうして、皇室機軸論に「神道祭祀」を持ち出したのか、その理由を説明して頂きたい。言い換えれば、伊藤の皇室機軸論に「神道祭祀」を読み込むことができるのはどうしてか、ということである。私がこのような質問をするのは、伊藤の実際の発言の中には「皇室祭祀」などという言葉は含まれていないからだ。これ

ら？

山折氏は「森喜朗首相に与う『鎮守の森』は泣いている」(『中央公論』七月号以下「泣いている」)で「天照大神が西歐社会における神(ゴッド)と対比しうる、聖なる權威の源泉とみなされるようになった」、あるいは「天照大神が『唯一至高の高みに祀りあげられるようになった』と述べ、さらに「天皇」現人神を頂点とする『一神教化』という路線」とも言っていた。これらを総合して、神道の「一神教化・キリスト教化」天照大神の「一神教(絶対神)化」天照大神の「一神教(絶対神)化」と読むことの問題があるのだろう。「問題あり」というのなら次回の反論においては、誰にも誤解の余地が無いような定義を提示してもらいたい。その際に、これまでの自分の発言と矛盾しないように気を付けることをお忘れなく。この点をちゃんとしないと、「ナチス思想の影響をうけた天照大神」唯一最高神という説こそ、さききのべた一神教化という試みの皮肉なパロディであり鬼子であった」とのご自身の文章は、そのまま「私の説もパロディです」と告白した証拠になってしまう。

ところで、山折氏の「わずかな宗教学的

は山折氏が解釈として挿入した言葉にすぎない。また、拙論で、私は伊藤の皇室機軸論は天皇大権について述べたものではないか、と問題提起をしておいたが、これについてのご回答は？

三、明治政府は「皇室儀礼のなかから宗教的性格を抜き去ることで(『祭祀と宗教の分離、内外から加えられる政教一致の批難を免れようとした』)という山折氏の説明に対して、私は「皇室祭祀が外国から問題視されたことは一度もない」と指摘した。これに対する山折氏の反論が面白い。外というのは外国のことではなく、「島地黙雷の行動をめぐるものだった」というのだ。山折氏は、島地の行動の中に「内外からの批判を読みとって論じた」と弁解する。思い入れの過剰？にしても、この論法はひどい。「先生が島地の行動に何を説きみとろうと」勝手に、読者は先生の文の中に島地の行動など読みとめることはできません。もう少し丁寧な文を書いて下さい」と申し上げたい。

このことに関係して、三つのことをお尋ねしたい。先生が島地の行動の背景に見た「当時の西歐諸国における政教関係の水準」

や「世界史の流れ」とは何ですか?」  
う解釈し洞察するかにかかっている問題」  
などといってお茶を濁しても、私への反論  
にはなりません。それがどういうものだった  
のか、それこそ自分の言葉で語って下さ  
い。ちなみに、拙著を読まれて既に御存知  
のことと思いますが、島地はフランスやド  
イツが深くキリスト教と結び付いているこ  
とを「臣深く其の治体を得たるに感ず」と  
「三条教則批判建白」の中で賞賛していま  
す。この発言をどう説明されますか? ま  
た、先生のような論法を用いるならば、憲  
法制定に関係した外国人たちが、国教の制  
定を勧めたり、キリスト教の全面解禁に反  
対したことも「外からの非難」として、考慮  
に入れる必要があるではありませんか?  
さらに、「皇室儀礼のなから宗教的性格」  
を抜き去ったと言われていますが、それは  
どういう事実を指しているのですか?

四、山折氏は、「一神教化運動」の「は  
てに」、大東亜戦争中、ナチス思想の影響  
をうけた軍部の支持のもとに神道界の一部  
に「天照大神を唯一最高の神とする神学」  
が説かれるまでになったのではないかと、と  
述べている。なんだかGHQ作の「共同謀  
った」と主張しているとも言っているのだら  
うか。

旧稿で原稿の升目を埋めるためではな  
く、拙論における私の主張を、読者に思い  
出していたとき、山折氏の議論と比較して  
いたいたために、関係箇所を次に引用す  
る。「その後、実証的な研究が進むにつれ  
て、このような理解が疑われはじめ、実は  
当時欧州で一般的だった信教の自由を認め  
た上で特定の宗教に特権を与えるという公  
認教制度の一種に過ぎなかったのではない  
か」という理解が有力になりつつある。た  
だし、この理解の仕方とも提言といった段階に  
とどまっておらず、多くの研究者の賛同を得  
るような確固たる学説はまだ存在しないと  
いうのが最先端の研究状況なのである」。

私の議論のどこが単純なのだろうか。い  
くら頭にきていても、相手の議論を正確に  
把握しないで反論したら、自ら墓穴を掘る  
だけですゾ!

山折氏は、私が「皇室神道を中心とする  
神話解釈こそが正しいとする視点から」、  
氏の神話解釈を『非学問的な空想』であ  
ると断じている」と述べ、それは「イデオ  
ロギー的な強弁」だと非難する。なるほ

議」読みたいだが、憲法制定以降の「一神  
教化運動」なるものを具体的に説明してい  
ただきたい。「思いつきによる反論では意  
味がありません」。

五、「天皇は『人間宣言』をした」とい  
う山折氏の単純な書きぶりに対して、私は  
「事はそう単純ではない」という批判をく  
わえたが、それについて、「それでも泣い  
ている」では言及がなかった。それは私の  
議論に納得したからだ、と解釈してよろし  
いか。

#### 墓穴を掘る議論

さて、山折氏は、私が氏の議論を「基本  
的な事実に対する無視、あるいは無知の上  
に描かれた虚像にすぎない」と批判したの  
は、『国家神道』研究に定説的な影響力を  
ふるって来た村上重良氏の考えに氏が反撥  
を覚えていたためではないか」と邪推して  
いる。「怨念」の次は「反撥」ですか(ト  
ホホ……)。先生はほんとうに「感情論」  
がお好きですね。山折氏は私の読解力を相  
当低く評価しておられるようですが、私にだ  
って村上説と山折氏の思いつきの違いくら

ど、イデオロギーにとらわれている人ほ  
ど、こういう読み方をするのかと納得し  
た。確かに私は「皇室を中心とした公的秩  
序形成と稲作とが日本神話のメインテーマ  
であることは疑う余地がないだろう」とは  
書いた。しかし、山折氏の神話解釈を  
「学問的な読み」とは言えない。『客観的  
研究方法』ではなからう」と断じたのは、  
「皇室神道を中心とする神話解釈こそが正  
しい」などという根拠からではない。それ  
は山折氏の議論が基本線を「無視」してい  
るからであり、文脈を「無視」して勝手に  
物語を裁断し、思うに任せて再構成してい  
るからである。私は、基本的な論点を押さ  
えた上で、それに同意しがたいのであれ  
ば、証拠と論理とを駆使してそれを批判  
し、自らの説を立証する、というのが学問  
的な態度であると考えている。それをしな  
いで「ここどこを繋げると、私にはこう  
読める」などというのは、学問的な「読  
み」でも、客観的な「方法」でもないと思  
張したまでのことだ。「私が正しいと思え  
る解釈に合わないから、あなたの説は間違  
っている」などというバカな主張はしてい  
ない。

い判別できる。本稿の冒頭で紹介した拙論  
『国家神道』論の系譜(上)」において、  
私は村上説に分析を加えているが、「国家  
神道」論の一つの到達点として、それ相応  
の敬意を表して論じている。どうやら、先  
の山折氏に対する批判には「非難するな  
ら、相手の論文くらい読みなさい」と付け  
加える必要がありそう。

また、山折氏は「新田氏によるとこの村  
上學説は、その後の実証的な研究が進むに  
つれて疑われはじめていたのだという。疑  
われはじめていたのであれば、それに代わ  
るべき有力な解釈や定説が今日存在するの  
だろうか」と問うた後で、今日の国家神道  
研究は「空洞化」の状況を呈していると主  
張する山口輝臣氏の文章を引用し、こう結  
論づけている。「現學界の状況が、新田氏  
のいうような単純なものではないらしいこ  
とが、この文章からだけでもわかるのだら  
う」。読者は、この文の意味がお分かりに  
なるだろうか? 「次の定説が現れなければ  
ば、前の定説が疑われはじめていたことにはな  
らない」とも言いたいのだろうか。そん  
なバカな! それとも、私が事実を反して  
「今日では新たな定説が存在するようにな

イデオロギーにとらわれている人間は、  
他人を非難する時に、往々にして、「おま  
えはイデオロギーにとらわれている」と  
か、「お前の思考は硬直している」などと  
口走る。それは、相手に自分の姿を投影し  
て、怒ったり、怯えたりしているのだ、と  
私は前から考えている。読者には、拙論  
と「それでも泣いている」とを是非読み比  
べていただきたい。私が論点としているの  
が「証拠と論理」であるのに対して、山折  
氏が「感情、思想、イデオロギー」を問題  
にしている様子が鮮やかな対照をなしてい  
ることに気づかれることだろう。

#### 「羊頭狗肉」ではないか

また、山折氏は「私とて新田氏と同様、  
日本神話や伝統神道の歴史が『稲』の問題  
を抜きにした『森』の問題だけで片がつく  
とは、はじめから思っていない」と弁解  
している。

片がつかないと最初から分かっているの  
なら、何故「稲」の問題を論じなかったの  
か。かつて論じた、今回は中心ではなかつ  
た、というのは言い訳にすぎない。縄文の

世界への回帰を主張するなら、その後の歴史や現代との整合性をどのようにして図るのかを論じなければ、気楽な思いつきの域をでない論文に墮してしまおうではないか。「これはほんとに思いつきを書いてるにすぎないな」と感じたのは、「泣いている」にあった「航空ビデオ」の件を読んだ時だった。山折氏はこう書いていた。「以前、日本列島を三千メートル上空から映したビデオをみたことがある。セスナ機をチャーターしてカメラに収めたものだったが、列島は行けども行けども森また森、山また山の連なりであった。その映像のどこにも稲作農耕社会の痕跡はみとめられなかった。農業革命や産業革命の進歩の爪跡を発見することはできなかった。三千メートルという高度はまさに縄文文化の原像を眼下に大きく映し出していたのである。―(中略)―このトリックは、日本列島に展開する歴史の深層が何によって動機づけられているかを一瞬のうちに明らかにしていたのだ」。これを讀んだ私の友人は「山折さん、目が悪いんじゃない？ 三千メートルだったら田圃や町並みくらい見えるよ(笑)。それに、見えているのは、縄文の森じゃなく

て、歴史的存在としての平成の森じゃないの」。ビデオを見ただけで「歴史の深層」を動機づけるものを発見できるなら、文献史学などというものはばかばかしくてやっつけられないのが当然だ。この文は、縄文の理想化を根拠に歴史を一挙に否定する「山折哲雄という学者の深層」に何があるのかを見事に暴露している。

最後に山折氏は「葦津氏が柳田・折口の神道論を敵視したように、神道そのものを敵対視するなどはじめから私の念頭にはなかった」と、またもやイデオロギー論に立ち返っている。一体、誰が山折氏の神道そのものに対する「敵視」などというものを問題にしたのだろうか。「神道についていえば、その将来における可能性いかんという観点からの議論だった」と言われるが、言い訳などしなくても、そんなことは文章をちゃんと読めばわかる。私は初めから山折氏の議論が神道に対して好意的かどうかなどという問題を問うてはいない。好意的なアドバイスでも間違っている場合もあれば、悪意あるアドバイスでも正しい場合がある。それをしっかりと「吟味」するのが学問人としての主体性というものだろう。

私は山折氏のように、他人に対して、「イデオロギー的対決の姿勢をなくせ」などという不遜な要求はしない。「あなたのイデオロギーや感情はそのまま結構ですから、証拠と論理に依拠して、どこまで共通の認識に到達できるかやってみませんか」と申し上げたいだけなのだ。

それにしても、あの「それでも泣いている」冒頭のリードは何だろうか。「皇室中心の『中央集権的』神話・神道論のようなイデオロギー的強弁を私は認めない」というのはまだ許せるが、「『地方分散的』なこそ『象徴天皇制』のあり方と柔軟に対応し、無理なくリンクする見方である」というのには開いた口が塞がらない。山折氏は自らの学問を現憲法の「しもべ」にしているのか？ こういう人をおつては「御用学者」と呼んだのではなかったか。さらに、「地方分散的」な神話解釈、神道論が、なぜ、国民「統合」の象徴である天皇と無理なくリンクするのか、その説明がまったくない。ただ、私はそう考えている。という山折氏の「イデオロギー的強弁」(?)があるだけだ。これを「羊頭狗肉」と言わずして、何と言おう。